

特集

地域医療を守るために

～皆で支え合い、今わたしたちにできること～

深刻化する医師不足や医師の過重労働、救急医療をどうするか・・・。

さまざまな問題を抱える中で、地域医療、主に離島やへき地の医療を守ろうと、

日々、現場で懸命に働く人たちがいます。

しかし、地域医療が抱える課題は、医療に携わる人達の努力だけでは解決することが難しく、

ますます厳しさを増しています。

離れて暮らす親の病気。夜間の子どもの病気。旅先でのケガ。

地域医療の課題は、あなたやあなたの家族の命に関わる身近な、そして重要な問題です。

地域医療を守る役割を、医療関係者だけに任せず、

わたしたち住民一人ひとりに何ができるのか、一緒に考えてみませんか？

診察室

鹿児島県の医療の現状と課題

鹿児島県は、温暖な気候の下、南北約600キロメートルに及ぶ広大な県域の中に、世界自然遺産に登録されている屋久島や、亜熱帯の奄美群島をはじめ特色ある島々を有し、多彩な魅力に溢れています。特に離島人口(171,652人)および離島面積(2,485キロ平方メートル)は全国第1位で、人が住んでいる離島数も28にのぼります。

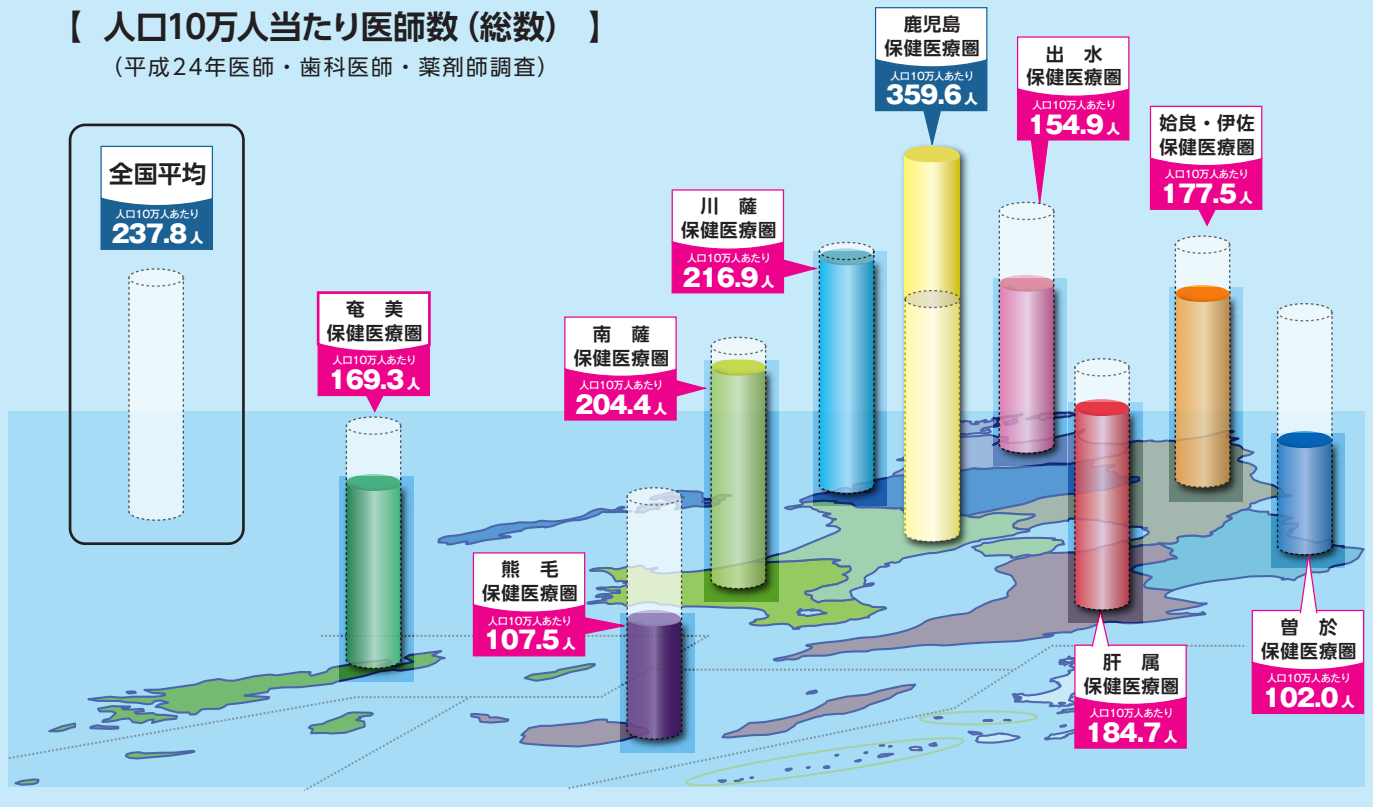
しかし、この地理的な特色はへき地や離島固有の厳しい環境を生み出したことから、これらの地域では地域住民の「かかりつけ医をはじめとした医師が不足し、地域のニーズに応えられない状況になっています。

人口10万人当たりの医師数で見ると全国平均を超えているのは、鹿児島市とその近郊のみで、それ以外の地域では全国平均を大きく下回っています。(図①) また、産科、小児科など厳しい勤務状況にある診療科でも、県全体の医師数が、全国平均を下回っています。(図②) 医師が不足した状況はこのような理由の他に、平成16年度から始まった臨床研修制度が大きく影響していると言われています。かつて、医師が不足す

図①

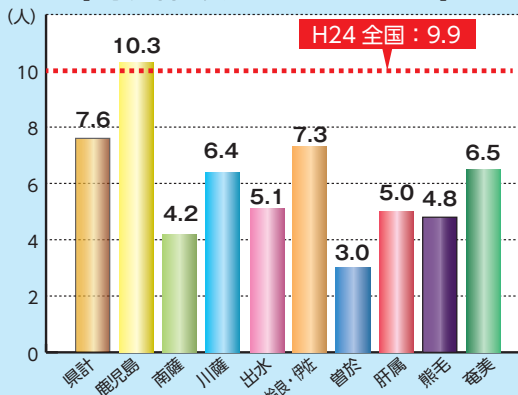
【人口10万人当たり医師数(総数)】

(平成24年医師・歯科医師・薬剤師調査)



図②

【小児科医数(小児人口1万人当たり)】



る地域に対しては、大学の附属病院などから医師を派遣して、地域全体の医師数のバランスを保っていました。しかし、臨床研修制度の開始により状況が一変します。それまで各大学の医学部生は、自身の在籍していた大学の附属病院で卒業後に研修を受けることが一般的でしたが、全国の研修病院の中から自由に選べるようになったのです。

結果、医学部生は卒業後、病院の規模が大きく、多様な患者と接する機会に恵まれた都市部の研修病院に流出したことから、地方の拠点的な病院でも医師が不足することとなり、地域全体でのバランスが保てなくなりました。

医師の不足を解消することは、地域医療を守るための大きな課題といえます。

医師の確保へ向けた取り組み

鹿児島県では、主に離島・へき地で診療を行う医師を確保するために、さまざまな取り組みを行っています。

医師の卵を育てるために

鹿児島大学医学部と連携し、入学定員の枠を広げることで、県内で養成する医師を増やしています。

また、自治医科大学(栃木県)や鹿児島大学医学部において、将来、県内の離島やへき地で勤務しようとする医師に対して、奨学金を貸与するなど、離島・へき地で診療を行う医師の育成に取り組んでいます。

若手医師を確保するために

医師になるためには、医学部卒業後、医師免許を取得し、2年間の研修を修了しなければなりません。新臨床研修医制度の影響により、減少が続いていた研修医に、県内にとどまってもらおうと、県内の病院や県医師会などが協力して、平成21年に「県初期臨床研修連絡協議会」が発足しました。現在、「オールかごしま」体制で、県内の病院に軸足を置き、将来の鹿児島の地域医療を支える研修医の確保に取り組んでいます。

医師がよりよく働けるために

県外在住医師の県内医療機関へのあっせん(「ドクターバンクかごしま」)による支援、厳しい勤務状況にある産科医などがよりよく働けるための支援、出産などで離職した女性医師がスムーズに職場復帰できるようにするためのサポートなどを行っています。

医学生時代



◆鹿児島大学医学部
入学定員の増
(85名→H23・117名)
◆地域枠学生の育成
(H18年…2名
↓H22年…20名)

卒後1～2年目



◆県内臨床研修医の確保

卒後3年目



◆鹿大病院・入局者数の確保

卒後4年目以上



◆U・I・Jターンの医師の就業支援

65歳以上勤務医



◆定年退職医師の活用



◆女性医学生や女性医師の支援 など

◆医師の離職防止 など

「鹿児島流」熱いハートの医師育てます!



臨床研修病院を紹介するパンフレット

「オールかごしま」体制で県内研修病院の魅力を発信しています!



県外イベントでの説明の様子

奨学金の貸与制度を活用した医師が地域に羽ばたきます!!



知事から「へき地医療機関勤務」の辞令交付

【問い合わせ先】 県庁 地域医療整備課 ☎099-286-2653

県の取り組みなどについて、詳しくはHPをご覧ください。

鹿児島県 医師確保

検索

VOICE

離島で愚直に医療と向き合っていく

◎県立大島病院副院長 (Uターン医師)

満 純孝 医師



昭和31年、奄美市生まれ。自治医科大学医学部卒業。中学・高校は鹿児島市内で過ごした。Uターンで帰島。現在、県立大島病院で副院長として勤務している。

県立大島病院に赴任して、4年目になります。当院は離島の救急医療を担う、奄美群島の中核病院で、明治34年に開設され、115年という歴史を有しています。平成26年度には、念願の救命救急センターを開設。奄美の救急医療・搬送が強化され、圏域外への患者搬送をできるだけ少なくし、群島内で医療が完結することを目指しています。

とはいえ、奄美は海に囲まれており、すぐに専門病院で受診ができるわけではありません。医療が完結できない場合でも、ある程度まで治療が必要になります。そのためには、私たち医師は、自分の専門性だけにこだわってはいただけません。専門知識や技術を深めつつも、幅広く診察できる必要があります。

離島の医療を守るためには、愚直に、医療に向き合うしかありません。医療の地域格差をなくそうと、さまざまに取り組みがされ、離島で働くことを志す学生もいます。そんな学生に伝えたいことは、情熱を持ち続けることの大切さです。意欲さえあれば、必ず道は開けてきます。

チーム医療で子どもたちに笑顔を

◎鹿児島大学病院 小児科医局 (県外大学出身)

加藤 嘉一 医師



昭和61年、鹿児島市生まれ。久留米大学医学部卒業。子どもの笑顔に魅力を感じ、小児科医を志した。現在勤める鹿児島大学病院では、子どもたちから、カトちゃんのお愛称で慕われている。

卒業後の研修病院先を決めるとき、県内の病院を見学したりする機会がありました。そこで先輩方から話を聞いて、人の温かさに触れ、故郷での就職を決めました。

研修医時代、与論島の診療所で過ごしたことは、貴重な経験でした。地域の方々に寄り添い信頼していただける医師になりたいと思いました。

鹿児島に帰ってきて、こちらは病院の連携体制が整っていると感じます。こうしたネットワークのおかげで、医療の連携がスムーズにいつているように感じます。

鹿児島は小児科医不足が深刻です。未来を担う子どもの将来と健全な発育のために、地域や医師も協力して、見守っていくことが大切です。特に小さな子どもは、自分の状態を訴えられない場合が多いので、話を聞き、触れ合うなかで、子どもの病状を細かくところまで把握しようとしていきます。

これからも子どもたちが笑顔になれるよう、その手助けができる医師を目指していこうと思っております。

住民の健康と地域のために診療所を守る

◎肝付町岸良診療所長 (県地域枠医師1期生)

新村 尚子 医師



昭和61年、鹿児島市生まれ。県地域枠医師1期生として、鹿児島大学医学部に入学。今年4月、肝付町岸良診療所に赴任。週2回の診療で、内科と外科を診察している。

受験勉強中に、県地域枠医師の制度を知り、チャレンジさせていただきました。人の命や健康を守る医師になり、必要としてくださる地域の方々のお役にしたいと思ったのが、きっかけでした。

肝付町岸良診療所に勤務して3ヶ月。診療所では、出来ることが限られているため、詳しい検査は町立病院で行います。診察では、患者さんの微妙な変化に気づき、大事に至る前に早めの検査・治療ができるよう、心がけています。

休みの日は、地域の方々と交流をさせていただいています。

肝付町は、山と海の大自然に囲まれた、とても魅力的な町です。地元の方は温かく声をかけてくださり、大変ありがたいです。

地域では、一人暮らしの高齢者が増えてきています。患者さんの生活環境も含めて、家族のような立場で話を聞き、寄り添える医師になりたいです。今までの先生方が築いてこられた患者さんとの信頼関係を守り、健康と地域の安心のために、これからも励んでいきます。

地域医療を守るために今、私たちができること

救急車の良識ある利用にご協力ください

◎救急救命士
(鹿児島市消防局)
肥後 賢志 さん



昭和40年、鹿児島市生まれ。昭和60年鹿児島市消防局入局。平成15年救急救命士試験合格。平成26年10月より、高度救急隊(ドクターカー)隊長として、現在、鹿児島市立病院に勤務。



約40%が軽症です。救急車は、応急処置院への到着時間も遅くなります。

今後、暑い日が続きますので、熱中症に十分お気をつけください。

現場到着時間が遅くなれば、当然、病院への到着時間も遅くなります。

車の良識ある利用にご協力いただきたいと思います。

鹿児島市においても、平成22年中約2万2千件の出場に対し平成26年中は約2万6千件と約4千件増加し、これにより現場到着時間も平成22年中の平均7.0分に対し、平成26年中は平均7.7分と遅くなっています。

救える命を救うためにも、普段から相談できる「かかりつけ医」をもち、「救急車の良識ある利用」にご協力いただきたく思います。

近年、全国的に救急車の出場件数、搬送人員数が増えており、それによって救急隊の現場到着時間も遅くなっています。

軽症者を救急病院に搬送し、重症者の受け入れが困難なこともあります。これまでも、「今、医師の治療が開始されたら助かるのに」という悔しい思いを幾度となく経験してきました。

「交通手段がない」「便利だから」と救急車を呼ぶ方がいます。「休日は休めない」「日中は用事がある」などの理由で救急外来を夜間や休日を受診する方もいます。これらの行動は、救える命を救えないことにつながります。緊急性のない休日・夜間の自己都合による気軽な受診(いわゆる「コンビニ受診」)を控え、日ごろから健康に関する相談ができる「かかりつけ医」をもつことで、医師との良好な関係を築きましょう。救急車や救急窓口などを適正に利用すること。一人ひとりがルールを守ることで「救えるはずの命を救う」ことにつながります。医師が「地域で働きたい」という気持ちを支えていくことなど、今、私たちにできることから始める必要があります。

SUPPORT ALL KAGOSHIMA

「オールかごしま」で支える 鹿児島県の地域医療

県内各地の医療機関で、今、この時も必死に働いている医師がいます。看護師、検査技師、薬剤師、患者さんの食事を作る方、院内の清掃を担う方などに支えられ、医療現場は24時間体制で動き続けています。医師は、決して一人で仕事をしているのではないのです。

そして、わたしたち県民も、医師を支える「オールかごしま」のメンバーです。

あなたの行動で、鹿児島県の地域医療が変わります。一緒に、安心して暮らせる鹿児島県を作りましょう。



近代医療の先駆け・鹿児島

幕末から明治にかけて、鹿児島は医療の面でも全国に先駆けて近代化を図りました。

医学校の設立や英国人医師の招聘など、

先人たちの功績は今でも鹿児島市内のあちこちに見ることができます。



西郷さんも敬愛した 英国人医師

ウィリアム・ウィリス

(William Willis 1837-1894)

日本の医学の近代化に尽力した英国人医師のウィリアム・ウィリスは、明治維新の立役者である西郷隆盛や大山巖^{おほやま いわお}などとも交流があり、鹿児島医科大学(鹿児島大学医学部の前身)の設立時から教壇に立った、鹿児島との縁が深い人物です。

1837年アイルランドに生まれたウィリスは、グラスゴー大学やエジンバラ大学で医学を学び、1862年25歳の時に駐日英国公使館・領事館付きの医師として来日しました。ウィリスが来日した頃の日本は明治維新に向けて国が大きく揺れ動いている時代で、ウィリスと西郷たちが出会ったのも1868年の鳥羽伏見の戦いでの事でした。大山巖に請われて薩摩藩の治療に駆けつけたウィリスは、負傷した藩士を西洋医学で治療し、西郷隆盛の弟の西郷従道をほじ

め多くの人命を救ったといわれています。

明治維新から3年後、西郷らの後押しもあり、ウィリスは西洋医療の指導者として鹿児島に招かれます。鹿児島医科大学に着任したウィリスは県内の病院の整備や医学教育に精力的に取り組み、それまで漢方や蘭学が主流だった鹿児島に近代医療の礎^{いしづえ}を築きました。教え子のなかには脚気^{かっけ}の予防法の発見で世界的に知られる高木兼寛^{かねひろ}もいます。また医学生への教育だけでなく、当時の食肉処理の方法を改めたり、牛や羊を放牧して牛乳やバターを作る酪農をすすめたりと、民間の衛生事情や食生活の改善も積極的におこないました。

ウィリスは鹿児島に4年滞在した後、休暇をとって一年間イギリスに戻りますが、そこでも鹿児島の医療のために西洋の医療事情をまとめる活動を行っています。その後また鹿児島に帰ってきましたが、西南戦争などの国内事情により再度イギリスに戻ることになりました。ウィリスの鹿児島での生活は6年ほどでしたが、そのなかで鹿児島の人々の健康を思い、日本の近代医療に尽くした功績は計り知れません。鹿児島大学医学部にはその偉業をたたえる「頌徳記念碑」が置かれ、鹿児島の医療に携わる人々を見守っています。

参考) 佐藤八郎「日本近代西洋医学の夜明け(英医ウィリアム・ウィリス)」(鹿児島大学医学雑誌Medical journal of Kagoshima University,47)

かごしま”医”跡巡り

■鹿児島大学医学部 附属病院跡記念碑



私学校の跡地に設立された県立鹿児島医学校および附属病院は、変遷を経て鹿児島大学医学部および附属病院となり、昭和49年に鹿児島市桜ヶ丘へ移されました。城山町には当時を偲ぶ記念碑が残されています。
所在地：鹿児島市城山町

■^{あか くら}赤倉病院の跡



医学校と病院を兼ねていた鹿児島医学校は、赤レンガ造りの洋風建築だったことから赤倉病院と呼ばれました。ウィリアム・ウィリスが初代校長兼病院長として着任し、近代医療の普及に務めました。
所在地：鹿児島市小川町

■医学院跡



薩摩藩第8代藩主島津重豪^{しまづしげひで}によって創設された医学院は、漢方の教育・研究施設として、武士だけでなく町人にも門戸を開く画期的な施設でした。現在は中央公園内に石碑が建てられています。
所在地：中央公園内(鹿児島市)

■ウィリアム・ウィリス頌徳記念碑



ウィリスの功績をたたえるために、門下生が中心となって明治26年に建立された石碑。鹿児島市城山^{かくりょう}にありましたが、現在は鹿児島大学医学部の鶴陵会館内に移設されています。
所在地：鹿児島市桜ヶ丘